一枚の絵
―別府大学と文化学院をつなぐもの―

山　本　晴　樹

「真理はわれらを自由にする」（Veritas liberat）という簡にして要を得た言葉は本学の建学の精神である。この言葉は初代学長佐藤義詮氏（1906―1987）が15年にもわたるアジア・太平洋戦争終結後の1946年５月に、本学の前身別府女学院（別府女子専門学校）の開学式で語ったとされている。筆者はこの言葉の由来（もっと正確に言えば精神の由来）について調べているが、ひとつの可能性として、佐藤義詮氏が卒業された東京のお茶の水にある文化学院での体験があるのではないかと考えている。文化学院は周知のように大正リベラリズムの時代にできた学校であり、その自由主義は学生に多大な影響を与えた。ここに若くして学ばれた佐藤義詮氏も、その自由な雰囲気のなかで育ったであろうことはおそらく間違い無い。

しかし、現在の別府大学の中に、文化学院とのつながりを目に見える形で示すものを求めようとすると、にわかには見あたらない。ところが、最近身近なところでそれを発見した。文学部の教授会が開かれる本館五階の会議室（520室）に架かっている一枚の絵である。サインは「Takigawa 1928」とある。滝川太郎という画家が1928年に描いた絵である。タイトルは「お茶の水風景」とされている。

滝川太郎「お茶の水風景」1928年（昭和３年）

滝川太郎（1903－1970）といっても最近ではあまりなじみがないが、実は戦後の美術界で随分話題になった人物である。このような画家の絵がどうして本学にあるのかと驚かれるかもしれない。滝川太郎は長野県松本市の出身で、若くして絵を志し、東京へ出て当時の有名な画家石井柏亭に師事する。その柏亭は1921年の文化学院（中学部）創設の時、校長西村伊作に乞われて、学監になる（もう一人の学監は与謝野晶子である）。そのとき滝川も助手のような形で、文化学院に務めることになった。

本学の佐藤義詮氏は文化学院（大学部）の第一回卒業生であるから、時期的には滝川太郎のいた頃と重なるので、当然面識はあったものと思われるが、直接的な結びつきを示すようなものは残されていない。ただ、佐藤義詮氏の同窓生である第一回卒業生16名の中には、のちに東京銀座の「兜屋画廊」主となる西川武郎がいて、この人は美術鑑定家でもあった滝川太郎と戦中戦後を通じて密接な関係をもつことになるので、佐藤義詮氏はあるいは西川を通して滝川太郎を見知ったのかもしれない。

さて件の絵であるが、「お茶の水風景」と題されているように、神田川にかかる橋の風景を描いている。現在の JR 中央線お茶の水駅脇の「聖橋」から川上の「お茶の水橋」を眺めた風景のようにも見える。滝川が洋画家を志したきっかけは、セザンヌの絵に出会ったことであったというから、この絵もその影響を受けているのかもしれない。滝川は1930年ころパリに行き、1940年に帰国する。それを機に数奇な運命をたどることになる滝川の渡仏直前のこの絵は、別府大学における佐藤義詮氏の文化学院とのつながりを示すかすかな痕跡であろう。

＜参考文献＞

加藤百合『大正の夢の設計家 西村伊作と文化学院』朝日新聞社 1990年

滝川留未子『画家 滝川太郎』遊人工房 2005年（私費出版）

清岡芳治『浪漫はるかに―佐藤義詮の生涯―』大分合同新聞社 2008年（非売品）